

現在開催中の「あいちアートの森」、堀川プロジェクトのメイン会場「東陽倉庫テナントビル 2F」にて、1月30日にアーティスト・トークを開催しました。

出品作家の関智生さんと加藤マンヤさんに、自作について語っていただきました。



△まずは、関智生さんによる解説を聞きました。

イギリス留学時代に取り組んでいた制作方法等についての詳しい説明の後、日本に戻ってきてから改めて考えさせられたことや影響を受けた作品の紹介をして下さいました。最後に、展示作品の技法や見どころについて教えて下さいました。

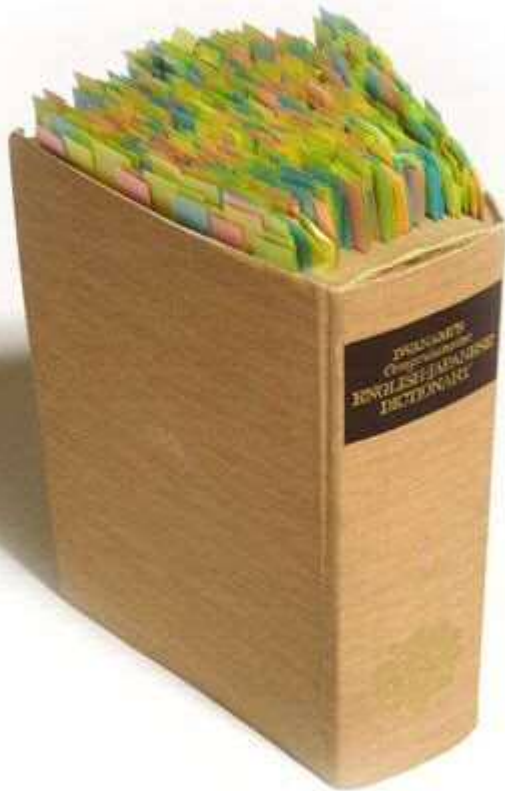
関さんは「反射／反復／反転」を課題において作品制作をしているということでした。今回の出品作品は「日本の自然の緑」を「緑の補色である“赤”」で描いた風景画です。明るく見えるところに色をつけ、暗く見えるところは色をつけないという、水墨画のような手法をとっています。実際の風景をそのまま描くのではなく、写真のネガ・フィルムのように色彩や濃淡を反転させて描いていることがわかりました。

続いて、加藤マンヤさんの展示ブースへ移動し、お話を聞きました。



△テーブルに見える白い作品についての説明を聞いているところ。

この作品は、食用の豚の油を精製したラードで形づくられた土地の上を人形が多数配置され、そこに作家が行ったことのある場所が投影されています。ラードは「人類に欠かせない食の歴史」を暗喩し、投影された場所を行き交う人々（人形）は、かつて自分がいた場所で今も続いている人々の人生であったり、すでに自分の中では止まってしまっている人々の記憶であったりを表している、ということでした。



△加藤マンヤ《マーキング中毒》2008年

これは、これまでの制作話に出てきた作品のひとつです。本や雑誌を読んでいて、重要だと思うところに目印として付箋をつけることがありますよね。この《マーキング中毒》は、付箋を貼りすぎると“付箋（重要だと思うところ）”の意味が無くなってしまふことを投げかけている作品です。マンヤさん曰く「常識だと思っていることが、よく考えてみると実はおかしいことがある。Fanny というより Cynical を意識しています。作品を見た人が、自分の日常の中で同じようなことを見つけて楽しんでもらえたらいい。」

マンヤさんの作品には、思わず“にやり”としてしまうユーモアがあります。

加藤マンヤさんは2月6日からスタートする常滑プロジェクトにも出品します。《マーキング中毒》を含む9点が、中部国際空港（セントレア）のPカウンターに展示されます。こちらも要チェックです。

今回は、作家さんの制作過程で考えていることを教えていただき、作品を見るときヒントになりました。貴重なお話をしていただき、ありがとうございました！

アーティスト・トーク第三回は、2月21日（日）午後2時?を予定しています。

(K0)